

精神障害者に対する偏見の研究

—認知・感情・社会的距離に着目して—

山中まりあ・森永康子・古川善也

Prejudice against people with mental disorders: Cognition, emotions, and social distance

Maria Yamanaka and Yasuko Morinaga

Prejudice against people with mental disorders is a persistent phenomenon. Inspired by Corrigan and Shapiro's (2010) path model of cognition-emotion-behavior of stigma, we examined the effects of news stories on these three factors. A total of 125 university students responded to questions after reading one of three news articles excerpted from Corrigan et al. (2013): a story describing a patient recovering from a mental disorder, a story regarding the improvement of mental institutions, and a story about dental care (control condition). Structural equation modeling revealed that the recovery story (vs. the dental care story) increased positive perceptions of people with mental disorders (i.e., the sense that people with mental illness are as ordinary as those without it), leading to positive behavior (i.e., decreasing social distance). The mental institution story (vs. the dental care story) increased negative emotion and decreased positive emotion, but these emotions did not affect participants' behavior. Although we did not find any significant paths from cognition to behavior through emotion, the current results suggested that perceived ordinariness may play an important role in the reduction of prejudice against people with mental illness.

キーワード : mental disorder, prejudice, cognition, emotion, social distance

問 題

精神障害者¹に対する偏見²の現状

日本では、躁うつ病や神経症を中心に精神障害と分類される患者が増加傾向にあり、これは現代社会のストレス増大が大きく関わっているとされる (榊原・松田 2003)。この環境に置かれた我々も

¹ 本研究では、精神保健及び精神障害者福祉に関する法律に基づき、統合失調症、精神作用物質による急性中毒又はその依存症、知的障害、精神病質その他の精神疾患を有する者を指す。また、特定の病名を指すものではなく、精神疾患全般、またはそれを患っている者とする。

² 本研究では、榊原・松田 (2003) の定義に基づき、物事に対して、合理的な根拠がないのにも関わらず示される、意見・判断、及び、それに伴う感情や態度とする。さらに、個人や集団に対して、好ましくないとみなされている側面だけを問題視し、実際には欠陥や不正、あるいは危険等がなくても、敵対行動や攻撃的行動を向ける態度とする。

心の病気にかかる可能性は低くはないだろう。しかし、心の問題に対する世間一般の理解度はいまだ低いままである。吉井 (2009) によると、精神障害者は攻撃的で何をするかわからないといった不可解な行動をとる危険なイメージや、恥ずかしい病、社会に受け入れられない病といった社会的落伍者というイメージを世間一般に持たれている。これは多くの人が精神障害者に対してネガティブにステレオタイプ化された認識や忌避的な態度を持っていることを表している。このような偏った認識や態度は差別行為へとつながり、結果的に社会と精神障害者との溝をより一層深めることが考えられる。

また、坂本ら (1998) は、精神障害者に対する偏見は、精神科既往歴を有する人の社会復帰を困難にさせるばかりではなく、発病後の精神科受診を遅らせ症状を悪化させる原因になると述べている。これは、精神障害者が生きていく上での様々な得られるべき機会や、適切な治療を受ける機会を逃す可能性につながるものになるであろう。精神障害者にとって生きやすい環境を作るためにも、精神障害者に対する偏見について検討し、精神障害者に対する理解を世間一般に深める必要があると考えられる。

日本における精神障害者に対する偏見に関する研究は、精神障害者の歴史から偏見の要因について紐解くもの (宮沢, 2013) や精神障害者に対する態度研究 (毛呂・島谷, 2010)、偏見低減プログラムの作成と実践 (山口・吉武, 2007) などがある。特に多く研究されているのが、精神障害者に対する偏見低減を目的とした社会的距離の変容の研究である。社会的距離とは、対象者に対しての快・不快を、その対象者と自分との間に保とうとする意識の程度を距離で表すものである (原口・前田・内野・牧田・前田, 2006)。山口・吉武 (2007) は、①パワーポイントを用いた、精神障害者への偏見の実態を知る内容の講義 (精神疾患についての医学的知見、統合失調症の現在の治療状況、精神保健、社会的歴史、各種世論調査報告等の実態調査、精神障害者とその家族に対する実態調査の紹介・説明)、②実際に地域社会の中で暮らす精神障害者のビデオの視聴という、①②からなる「偏見低減プログラム」を実施した。その結果、プログラムの実施後に社会的距離が縮まり、偏見が低減したことを見出している。また、伊礼・鈴木・平上 (2013) も、精神科での看護実習の前後で精神障害者に対する社会的距離を測定し、実習後に社会的距離がポジティブに変容したという結果を報告している。しかしながら、こうした研究ではプログラムや実習により精神障害者に対する態度の変容を見出しているが、どのようにして態度が肯定的になったのかについては明らかにされていない。精神障害者を理解し、偏見低減の実践をより有用なものにするためにも、偏見がどのような要因によって生じているのか、どのような過程で態度が変容するのかなど、変容のプロセスにより着目すべきであると考えられる。また、態度の変容を示した結果は、一時的なものである可能性が高く、偏見低減の持続性が不明である。変容のプロセスを明確にすることにより、どのようにすればより確実な偏見の低減が可能になるのかという示唆が得られるのではないだろうか。

本研究では、精神障害者のスティグマ³に関する Corrigan & Shapiro (2010) のモデル (Figure 1) を

³スティグマとは、特定の集団に対する否定的にラベリングされた認知・感情・行動を表す概念である (檜原・河合・梅垣, 2014)。



Figure 1. 精神障害者に対するスティグマの3要因のパスモデル
(Corrigan & Shapiro, 2010をもとに作成)

もとに、精神障害者に対する社会的距離の変容について検討する。このパスモデルは、精神疾患全般に対するスティグマを、認知、感情、行動の3要因に分類している。精神障害者に対して、精神障害者は何をするかわからないといった「危険」を認知すると、「恐怖」の感情が喚起され、「回避」といった社会的距離が遠くなるような行動が生じやすくなることを説明している。また、Corrigan et al. (2002) は、社会的距離を縮めるためには認知にアプローチをすることが必要だと主張している。檜原ら (2014) は、Figure 1 のパスモデルが示すように、認知が、その後の感情や行動を生起する要因となっており、認知を変容させる働きかけをどのように行うかが重要な点となることを示唆している。

精神障害者に対する偏見を生じさせる要因

精神障害者に対する偏見が生じる要因の1つとして、マスメディアによる精神障害者に関する報道の在り方が挙げられる。精神障害者が関わる事件であることがわかると、精神科に通院している、または精神科の入院歴や通院歴があるといった報道がなされ、そのたびごとに、「精神障害者は危険である」といった差別や偏見が助長されることが指摘されている (宮沢, 2013)。こうした日本におけるマスメディアによる事件報道の在り方は時代とともに変化している。2010年版精神保健福祉白書 (精神保健福祉白書編集委員会, 2009) によると、1970年代までの新聞記事には「野放し異常男」「精神病者 荒れ狂う」といった見出しが躍り、容疑者は通常、実名が公開されていた。しかし、80年代になると露骨な差別的表現は消え、責任能力に著しく疑問がある場合は匿名が原則になり、精神科の入院歴を添えるのが通例となったという。このことから、1970年代までの精神障害者に対する強烈な印象づけが今日の精神障害者に対する偏見につながっているのではないかと推測できる。

2007年版精神保健福祉白書 (精神保健福祉白書編集委員会, 2006) によると、全国精神障害者家族会連合会が病歴報道をすべきでないという要望を報道各社に行ったと報告されている。理由として、病歴を報道することは精神障害者への偏見を助長し、精神科への受診を阻害することになるなどが挙げられている。しかし、報道機関内での検討は行われても実質的な変化はみられなかったという。それに対して、マスメディアによる事件報道の在り方が見直される契機となった事件がある。それが、2001年に起こった大阪教育大附属池田小学校事件である (精神保健福祉白書編集委員会, 2006)。犯人は精神科に通院歴があり、統合失調症と診断されていたことが大きく取り上げられ、当時大々的に報道された。精神障害が事件を引き起こす原因であったかのように報道され、多くの人が「精神障害者は危険である」「何をかわからない」といった偏見を抱き、精神障害者に対する偏見を増大させる結果となった (精神保健福祉白書編集委員会, 2006)。

しかし、実際の精神障害者の犯罪率は極めて低い。2011 年版犯罪白書 (法務省法務総合研究所, 2011) によると、精神障害者及び精神障害の疑いのある者による一般刑法犯検挙人数は、2010 年の検挙人員総数 32 万 2620 人のうち 2882 人であり、その率は 0.9% である。これに対して、精神障害者は 2011 年には 394 万人であり (法務省法務総合研究所, 2011), およそ人口の 30 人に一人つまり 3.3% 程度である。したがって、精神障害者と犯罪を短絡的に結び付けるのは適切ではないだろう。

Corrigan, Powell, & Michaels (2013) は、精神障害者に関する新聞記事の影響について検討を行っている。この研究では、精神疾患に関する 2 つの新聞記事と、統制条件として歯科衛生に関する記事 1 つの計 3 つの新聞記事のいずれかを無作為に割り当てた研究参加者に読ませ、読む前と読んだ後の精神障害者への支持的態度やスティグマ尺度による態度の変化を検討している。3 つの新聞記事の内容は、①精神科におけるリハビリプログラムにより、精神障害者が次第に回復した記事、②統合失調症を患っている囚人が刑務所独房に収容され神経衰弱になったことで自殺した事件をもとに、刑務所制度の見直しの検討を主張する記事、③統制条件として歯科衛生に関する記事である。①の回復に関する記事を読んだ参加者は、読む前に比べて精神障害者に対してポジティブな態度が増加、ネガティブな態度が減少し、②の制度に関する記事の場合には、記事を読む前に比べて精神障害者に対してネガティブな態度が増加、ポジティブな態度が減少したという結果が報告された。②の制度記事に関しては、精神障害者に対する刑務所制度の見直しに関する記事であるにもかかわらず、精神障害者に対してネガティブな態度が増加した。これは、記事の中に、“統合失調症の囚人が自分の首をペンで刺し自殺した”というショッキングな内容が含まれていたためと考えられる。このように、記事の内容によっては精神障害者に対する偏見が助長される可能性もあり、たとえ精神障害者への偏見低減や精神障害者のために制度の見直しを意図した報道であっても、それら全ての報道が精神障害に対する態度にポジティブな影響を及ぼすわけではないと言えよう。

本研究の目的と仮説

本研究では、精神障害者に対する偏見を、Corrigan & Shapiro (2010) の精神障害者に対する認知・感情・行動のモデルを基に、偏見のメカニズムを解明し、どのような要因が偏見や差別行動へとつながるのかを検討することを目的とする。その際、Corrigan et al. (2013) で使用された、“精神科におけるリハビリプログラムにより、精神障害者が次第に回復した記事 (以下、回復記事)”と“刑務所独房に収容されており、統合失調症を患っている囚人が神経衰弱になり自殺した事件に基づき、刑務所制度の見直しの検討を主張する記事 (以下、制度記事)”を本研究でも使用することとする。

本研究における仮説は以下の通りである。統制条件に比べ、回復記事を読んだ場合は、肯定的な認知 (精神障害者は安全である、精神障害者は明るい、など) を高め、肯定的感情が喚起され、社会的距離が縮まると予想する。一方で、統制条件に比べ制度記事を読んだ場合は、否定的な認知 (精神障害者は危険である、精神障害者は迷惑である、など) を高め、否定的感情が喚起され、社会的距離が大きくなると予測する。

方 法

参加者 広島大学の学生を対象とした。回答に不備のあった者等を除き、125 名 (男性 87 名、女性

38名、平均年齢19.1歳、 $SD = 1.13$)を分析対象とした。

実施時期 2015年7月。

実験計画 新聞記事の内容(3:回復記事, 制度記事, 歯科衛生記事)を実験条件とした, 1要因3水準参加者間計画の質問紙実験であった。

手続き 講義担当者の許可を得た上で, 授業開始前の時間を利用し質問紙実験を行なった。参加者を回復記事条件, 制度記事条件, 歯科衛生記事(統制)条件にランダムに振り分け, 記事を読んだ後の精神障害者に対する認知, 現在の感情, 精神障害者に対する行動について回答を求めた。質問紙回収後に, 講義担当者からデブリーフィングが行われた。なお, 性別と年齢は, 質問紙実験に先立ち3週間前に実施した他の質問紙調査への回答を用いた⁴。

質問項目

認知 精神障害者に対する認知を測定するために, 星越・洲脇・寛成(1994)の使用したSD法尺度を利用した。この尺度は, 星越らが大学生の持っている精神障害者に対するイメージを測定するために用いたものである。星越ら(1994)は20項目を用いていたが, 本研究では参加者の負担を減らすために, 精神障害者に対するイメージを端的に, かつわかりやすく表していると考えられるものを計9項目選択した(Table 1を参照)。回答は7段階尺度で求めた。

感情 新聞記事を読んだ後の感情状態を測定するために, 小川・門地・菊谷・鈴木(2000)の一般感情尺度を利用した。「肯定的感情」「否定的感情」「安静感情」の下位尺度のうち, 否定的感情項目(8項目:緊張した, 恐ろしい, 動揺した, うろたえた, そわそわした, びくびくした, 驚いた, どきどきした)と安静感情項目(8項目:平静な, ゆっくりした, 静かな, ゆったりした, のどかな, くつろいだ, のんきな, 平穏な)を用いた。愉快的な, やる気に満ちた, のような肯定的感情は, 精神障害者へのネガティブな感情を扱う本研究の目的にそぐわないと判断し, 使用しなかった。回答は「1.全く当てはまらない」から「7.非常にあてはまる」の7件法で求めた。

行動 精神障害者に対する社会的距離を測定するために, 浅井(1997)の精神障害者に対する受容度尺度を利用した。浅井(1997)は24項目を用いていたが, 本研究では, 精神障害者に対する社会的距離項目(4項目:精神障害者の人と行動を共にすることができると思う, 精神障害者の人と結婚することができると思う, 精神障害者の人の隣に座ることができると思う, 精神障害者の人と友達になれると思う)を使用した。回答は「1.全く当てはまらない」から「7.非常にあてはまる」の7件法で求めた。

結 果

因子分析

認知 認知を測定するために用いた尺度について, 1因子構造を仮定した最尤推定法による確認的因子分析を行った。その結果, 適合度が基準を満たさなかった($CFI = .847$, $RMSEA = .145$,

⁴ 質問紙実験に先立ち, 精神障害者に対する態度と関連が予測される個人特性についても2週にわたり回答を求めた。すべてのデータ情報を対応させるため, 回答者IDとして, 学生番号の下3桁と携帯電話番号の下4桁の数字の記入を求めた。なお, 個人特性の結果については, 使用した尺度に問題があり本報告では扱わない。

SRMR=.079)。そこで、探索的因子分析を行った。スクリープロットにより 2 因子解が示唆されたため、因子数を 2 に指定した上で最尤法とプロマックス回転による分析を行った (Table 1)。その結果、第 1 因子には「明るい」「安全な」といった 6 項目が負荷し、親しみやすさを表す項目群であるため、「親しみやすさ」因子とした ($\alpha=.830$)。第 2 因子には「迷惑でない」「こわくない」「きれいな」といった、一般的に不快に感じられない表現が含まれた 3 項目が負荷しており、「普通さ」因子とした ($\alpha=.787$)。それぞれの因子に負荷する項目の平均値を算出し、尺度得点とした。それぞれ高得点であるほど、精神障害者に対して肯定的であることを表す。

Table 1
精神障害者に対するイメージ尺度の因子分析結果

	1	2	共通性
第1因子「親しみやすさ」 $\alpha=.830$			
陽気な—陰気な	.857	-.152	.758
暗い—明るい	-.848	.074	.724
役立つ—役立つでない	.523	.140	.293
冷たい—温かい	-.456	-.063	.212
良い—悪い	.450	.384	.350
危険な—安全な	-.422	-.343	.296
第2因子「普通さ」 $\alpha=.787$			
迷惑な—迷惑でない	.113	-.906	.834
こわくない—こわい	.089	.805	.656
汚い—きれいな	.048	-.608	.371
因子寄与	3.474	3.369	
因子間相関		.652	

感情 一般感情尺度について、安静感情と否定感情の 2 因子構造を仮定した最尤推定法による確認的因子分析を実行した。その結果、十分な適合度が得られた (CFI=.911, RMSEA=.098, SRMR=.074)。安静感情 ($\alpha=.901$)、否定感情 ($\alpha=.943$) について、それぞれ平均値を算出し、尺度得点とした。高得点であるほど、それぞれの感情状態が強いことを表す。

行動 精神障害者に対する受容度尺度の社会的距離について、1 因子構造を仮定した最尤推定法による確認的因子分析を実行したところ、十分な適合度が得られた (CFI=.912, RMSEA=.272, SRMR=.064)。さらに、内的整合性も高かった ($\alpha=.836$) ため、4 項目の平均値を算出し、社会的距離得点とした。社会的距離は高得点であるほど社会的距離が近い、すなわち、精神障害者に対して差別的行動をとる可能性が低いことを表す。

新聞記事の影響

Table 2 に新聞記事の 3 条件のそれぞれについて、認知、感情、行動の平均値と標準偏差を示した。条件間の比較を行うために、それぞれの尺度について、1 要因 3 水準の分散分析を行った (Table 2)。その結果、親しみやすさ、安静感情、否定感情において条件 (記事) の主効果が有意であった。多重比較 (Shaffer 法) を行ったところ、これら 3 つのそれぞれにおいて、回復記事条件と制度記事条

件の間、制度記事条件と歯科衛生記事条件の間に有意な差があり、回復記事条件と歯科衛生記事条件には差異が見られなかった。回復記事条件と歯科衛生条件の参加者は制度記事条件の参加者よりも、精神障害者に対して親しみやすさを感じ、安静感情が高く、否定感情が低かった。普通さの認知においては有意な主効果が得られたものの、下位検定の結果、条件間に有意な差はみられなかった。社会的距離においては、記事の主効果に有意傾向が見られたが、下位検定の結果、有意な差は得られなかった。

Table 2

条件ごとの認知感情行動の分散分析結果

		回復記事 (N=43)	制度記事 (N=46)	歯科衛生記事 (N=36)	F値	p値
		M (SD)	M (SD)	M (SD)		
認知	親しみやすさ	3.89 (0.83) a	3.30 (0.76) a,b	3.76 (1.02) b	5.799	.004
	普通さ	4.24 (1.11)	3.69 (0.92)	3.65 (1.26)	3.833	.024
感情	安静感情	5.17 (0.94) e	4.03 (1.12) e,f	4.71 (1.08) f	13.461	.000
	否定感情	2.09 (1.02) g	3.25 (1.30) g,h	2.61 (1.16) h	10.937	.000
行動	社会的距離	4.47 (1.14)	3.97 (1.23)	4.01 (1.18)	2.360	.099

同じアルファベット間に有意差があることを示す。

認知・感情・行動のパスについての検討

認知から感情を経由して行動につながるパスについて検討するために、Corrigan & Shapiro (2010) に基づいた Figure 2 のようなモデルを想定して、共分散構造分析を行った。その結果、十分な適合

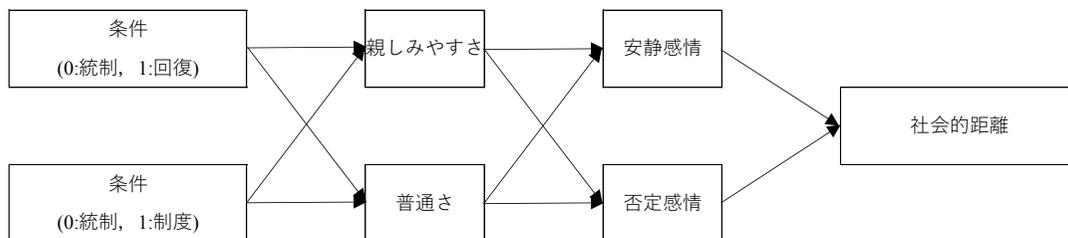


Figure 2. 認知・感情・社会的距離のパスモデル

度が得られなかったため (CFI=.775, RMSEA=.195, SRMR=.162), 飽和モデルによる分析を行った。有意でないパスを除外し、適合度を比べながら共分散構造分析を繰り返し、モデルを再検討した。最終的なモデルを Figure 3 に示した。Figure 3 から、歯科衛生記事 (統制条件) に比べ、回復記事を読むと普通さの認知が高く、それが精神障害者に対する社会的距離を縮めること、歯科衛生記事に比べ制度記事を読んだ場合には、親しみやすさの認知が低く、さらに安静感情が低く、否定感情が高いことが示された。しかし、Corrigan & Shapiro (2010) のモデルのように、認知から感情を経由して、行動が変容するという結果は得られなかった。

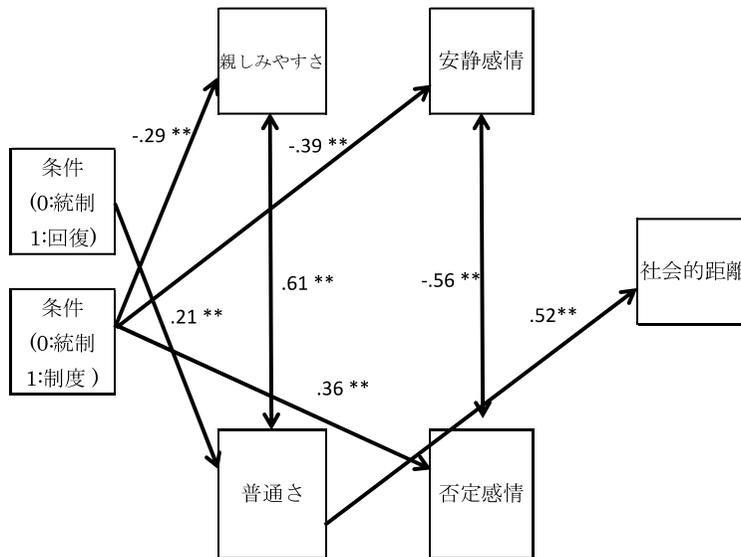


Figure 3. 認知・感情・行動のパスモデルについての共分散構造分析の結果 (CFI=1.000, RMSEA=.000, SRMR=.065, $**p<.01$, $*p<.05$)

考 察

本研究では、Corrigan & Shapiro (2010) の精神障害者に対する認知・感情・行動のモデルを基に、どのような要因が偏見や差別行動へとつながるのかを検討することを目的とした。その際、Corrigan et al. (2013) で使用された、“精神科におけるリハビリプログラムにより、精神障害者が次第に回復した記事”と“刑務所独房に収容されており、統合失調症を患っている囚人が神経衰弱になり自殺した事件に基づき、刑務所の制度を見直しの検討を主張する記事”を用いた。また、統制条件として、歯科衛生に関する記事を使用し、計3つの新聞記事で検討を行った。

Corrigan & Shapiro (2010) で示されたモデルに基づき、認知、感情、行動の影響過程について検討するために、共分散構造分析を行った結果、Corrigan & Shapiro (2010) とは異なるモデルが得られた (Figure 3)。歯科衛生記事 (統制条件) に比べ、回復記事を読むと普通さの認知が高まり、それが精神障害者に対する社会的距離を縮めることが示唆された。また、歯科衛生記事に比べ制度記事を読んだ場合には、親しみやすさの認知を低めること、さらに安静感情を低め、否定感情を高めていることが示唆された。しかし、こうした親しみやすさの認知や感情は社会的距離に影響を与えないことが示された。Corrigan & Shapiro (2010) は、精神障害者に対して危険を認知することで恐怖の感情が喚起され、それによって回避行動が生じると述べている。しかし、本研究の結果は、認知と感情が結びつかないこと、行動に影響を与えるのは認知であることが示されている。つまり、精神障害者に対する行動は感情よりも認知に影響されていることが示唆される。たとえ、精神障害者に対して好ましくない感情が喚起されても、多くの場合には回避行動は生じないだろう。これは、本研究で扱った行動が、行動そのものというよりもどの程度近くに座れるかというような自分の行動についての予測であったことが関係しているのかもしれない。

また、本研究では Corrigan (2013) の新聞記事を用いた検討を行ったが、記事内容、すなわち与えられた情報によって、影響する要因が変わることが示された。また精神障害者は健常者と変わらないという認知が生じることの重要性が明らかとなった。精神障害者は「普通である」という認識は社会的距離を縮めることにつながり、偏見低減を試みるにあたり重要な役割を果たすと考えられる。精神障害者の引き起こした犯罪などの情報を世間に提示するとき、いかにして偏見を助長することなく、精神障害者への理解が深まるよう促すかが重要な課題であるだろう。

本研究の限界

精神障害者に対する偏見の研究を質問紙で行うことには限界がある。顕在的な指標は意図的な回答の影響を免れ得ない。そのため、今後は潜在的な面から偏見を測定することも必要であろう。潜在的な面を測定する代表的な測定法として、潜在的連合テスト (Implicit Association Test: IAT) を取り入れることも視野に入れ検討すべきである。

また、本研究での行動とは、質問紙上で測定した結果であり精神障害者と対面した結果ではない。よって、実際に参加者がどのような行動をとるのかが明確にされていない。今後、精神障害者役の実験協力者を用いた実験を行うなどして、実際の精神障害者に対する参加者の行動を検討すべきであろう。

本研究の意義

本研究の意義は、精神障害者は「普通である」という認知が社会的距離を縮めることにつながり、偏見低減に重要な役割を果たすことを明らかにした点である。偏見が生じるメカニズムを解明し、介入すべき要因を明らかにすることで、より効果的な偏見を低減するための示唆を得られたと言える。

参考文献

- 浅井暢子 (1997). 精神障害者に対する意識と受容 日本社会精神医学会, **14**, 234-235.
- Corrigan, P. W., Powell, K. J., & Michaels, P. J. (2013). The effects of news stories on the stigma of mental illness. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **201**, 179-182.
- Corrigan, P. W., Rowan, D., Green, A., Lundin, R., River, P., Uphoff-Wasowski, K., White, K., & Kubiak, M.A. (2002). Challenging two mental illness stigmas: Personal responsibility and dangerousness. *Schizophrenia Bulletin*, **28**, 907-922.
- Corrigan, P. W., & Shapiro, J. R., (2010). Measuring the impact of programs that challenge the public stigma of mental illness. *Clinical Psychology Review*, **30**, 907-922.
- 原口健三・前田正治・内野俊郎・牧田潔・前田久雄 (2006). 精神障害者に対する偏見・スティグマの研究—精神科実習は精神障害者に対する社会的距離を縮めるか？ 作業療法, **25**, 439-448.
- 法務省法務総合研究所 (2011). 平成 23 年度版犯罪白書
http://hakusyo1.moj.go.jp/jp/58/nfm/n_58_2_4_5_1_0.html (2016 年 1 月 23 日)
- 星越活彦・洲脇 寛・寛成文彦 (1994). 精神病院勤務者の精神障害者に対する社会的態度調査—香川県下の単科精神病院勤務者を対象として 日本社会精神医学会雑誌, **2**, 93-104.

- 伊礼 優・鈴木啓子・平上久美子 (2013). 精神看護実習における精神障害者に対する学生の認識の変化—精神障害に関する情報源・精神病イメージ調査・社会的距離尺度を用いて—名桜大学紀要, **18**, 125-140.
- 檜原 潤・河合輝久・梅垣佑介 (2014). うつ病罹患者に対するスティグマの態度の現状と課題—潜在尺度の利用可能性への着目—心理学評論, **57**, 455-471.
- 宮沢和志 (2013). 精神障害者に対する差別・偏見を軽減するために歴史を伝えることは有効か—精神保健福祉行政史を伝えることの有効性をアンケート調査から考察する—金城学院大学集, **9**, 102-125.
- 毛呂裕子・島谷まき子 (2010). 精神障害者に対する社会的態度—精神障害に関する知識・経験・その他の要因からの検討—昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **12**, 87-97.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成—心理学研究, **71**, 241-246.
- 榊原 文・松田宣子 (2003). 精神障害者への偏見・差別及び啓発活動に関する先行文献からの考察—神戸大学医学部保健学科紀要, **19**, 59-74.
- 坂本真士・杉浦朋子・蓮井千恵子・北村總子・友田貴子・田中江里子・木島伸彦・丹野義彦・北村俊則 (1998). 精神疾患への偏見の形成による要因—社会心理学的手法によるアプローチ—精神保健研究, **44**, 5-13.
- 精神保健福祉白書編集委員会 (2006). 2007年版精神保健福祉白書—中央法規出版
- 精神保健福祉白書編集委員会 (2009). 2010年版精神保健福祉白書—中央法規出版
- 吉井初美 (2009). 精神障害者に関するスティグマ要因—先行研究をひもといて—日本精神保健看護学会誌, **18**, 140-146.
- 山口艶子・吉武久美子 (2007). 精神障害者への偏見低減アプローチに関する研究—その3—偏見低減プログラムの一試案の作成と実施—純心現代福祉研究, **11**, 49-68.

付記

本論文は、広島大学教育学部に提出した平成28年度卒業論文をもとに執筆したものである。本研究の一部は、日本教育心理学会第58回総会で報告した。